

ある野球選手の人生を見つめる

長野県蘇南高等学校長 小川幸司

1 スポーツマンシップの人、島田叡

今日は、ある野球選手の人生をたどります。

その人の名前は、島田叡（しまだあきら）と言います。1901年（明治34年）、兵庫県須磨村（現在の神戸市須磨区）の医者の子に生まれた島田は、中学・高校・大学と野球に打ち込みました。特に旧制第三高校時代の彼は、長身で俊足だった島田は、一年生の時からセンターを守る三番バッターでした。ヒットを打ち、盗塁をし、ファインプレーの守備を重ねる島田は、後輩たちの憧れの的でした。三高時代の友人たちは口をそろえて、島田は「スポーツマンシップの人」であったと振り返っています。①どんなに劣勢だったとしても何とかならないかと知恵をしぼり、ベストを尽くす。②そのために与えられた自分のポジションを守り抜く。それが彼の魅力でした。

やがて島田は東京帝国大学法学部に進学します。そして在学中に乞われて三高野球部の監督に就任しました。島田がいなくなってから弱体化して崩壊寸前の母校野球部の立て直しを頼まれたのです。

当時のスポーツは根性主義でした。三高野球部も何時間も練習を続け、照明設備などまだない時代ですから、暗くなってボールが見えなくなっても、付着した石灰の白さでボールが見えるのだと豪語していました。しかし島田監督は二つの点で新しい方針をとりました。①根性主義ではなくて、合理的に上達する練習メニューを実践する。②部員の信頼関係を構築するために相互の対話を重視する。

まるで現代の部活動につながるような先進的な実践を島田は重ねました。当時の日本社会は、男子が徴兵制で軍隊経験をする、タテの命令が重んじられる社会です。そのなかで合理性や対話を大切にしたい島田は、異色の存在でした。

1925年（大正15年）、島田は内務省の官僚となりました。警察や地方政治をとりしきるエリート省庁です。当時の県知事は、今のような選挙で決められるのではなくて、内務省から派遣されていました。ただ、島田は、部下の警察に「愛される警察官になれ」「市民の幸福のために行き過ぎた杓子定規を捨てよ」と訓示するなどして危険人物と見なされ、内務省の出世レースからは外れた存在であったようです。

2 沖縄へ

1931年、日本は満洲事変をおこして中国東北地方を占領しました。やがて1937年には日中全面戦争がはじまり、それをめぐって資源の輸入を妨害されたことから、日本は1941年12月にアメリカをはじめとする連合国に対して太平洋戦争を始めました。最初のうちこそ、東南アジア、オーストラリア、太平洋の島々に占領地を拡大しましたが、半年後のミッドウェーの海戦に敗北して以降、日本は攻め込まれ続け、膨大な戦死者を出していきます。

1944年7月にはアメリカがサイパン島を占領し、日本本土がアメリカの戦闘機の爆撃圏内に入ります。制空権を奪われたこの時点で、日本が勝てる可能性はなくなりまし

た。しかし日本軍は戦闘を続けました。そして日本各地の空襲は激しくなり、1945年3月には東京大空襲が起こります。アメリカ軍が最初に上陸するのは、日本の最も南にある沖縄県になることは明らかでした。

当時、沖縄県の泉守紀知事は、空襲が激しくなると県庁の職員たちをおいたまま、那覇から離れた普天間の防空壕に逃げ込み、さらには東京出張に出かけて175日も沖縄に戻りませんでした。沖縄の人々を守るべき県知事が実質的にいなくなっていました。

1945年1月、内務省は、島田勲を沖縄県知事として派遣することを発表しました。周囲の人々は島田に任命を断るよう説得をしました。沖縄で何が起こるかが明らかだったからです。妻も反対しました。それに対し島田は、「誰かが、どうしても行かなならんとあれば、言われたおれが断るわけにはいかんやないか。おれが断ったらだれかが行かならん。おれは行くのは嫌やから、誰か行けとは言えん。」と答えました。

島田は、ついていくと言う家族を残し、見送りに集まった仲間に「家族のことを頼む」と最後の言葉を残して、沖縄に旅立ちました。

3 沖縄の人々のいのちをどう救うか

当時の日本では「一億玉砕」が唱えられていました。兵士だけでなく一般市民も皆戦い抜くことが命ぜられていました。敵に降伏することなどもってのほかで、つかまりそうになったら自決をするのだと教え込まれていました。「生きて虜囚の辱めを受けず」(『戦陣訓』)という言葉が叩きこまれていたのです。

しかし、沖縄に赴任した島田は、いかに戦うかではなく、いかに人々を生きのびさせるかに取り組みました。

第一に、那覇を中心とする住民たちを島外や島の北部に疎開させる作戦をとりました。しかし妻や子どもは、働いている父親と離れて疎開することを望みませんでした。島田は「疎開」ではなく「県内人口調整」とネーミングして、命を守るための措置だと人々を説得しました。

第二に、前知事と同じように県外に脱出する県庁の上層部や教職員に対しては、逃げずに県民を守ることを命じました。逃亡した者に対しては、懲戒免職などの厳しい処分を加えました。島田のこの姿勢を見て、県庁の職員たちが「我らの長官はやるぞ」と知事に厚い信頼を寄せることになりました。

第三に、アメリカ軍の上陸にそなえて県民の食糧の確保につとめました。そのために命をかけて自ら台湾に出張し、食糧を沖縄県に供出する約束をとりつけました。当時は台湾もいつアメリカ軍が上陸してくるかをおそれていたときです。その台湾の人々を説得して大規模な食糧援助を可能にしたのでした。

連合国の沖縄攻略軍は1400隻の艦船、1700機の戦闘機、45万人の兵士という圧倒的な軍事力をもって迫りました。3月26日、慶良間諸島に、そして4月1日、沖縄本島に、連合軍が上陸します。アジア・太平洋戦争における唯一の住民を巻き込んだ国内地上戦となった沖縄戦の始まりです。このとき日本軍はほとんど戦わずに南部に撤退しました。軍部は沖縄でなるべく長く戦う持久戦を展開して、アメリカ軍が本土を攻撃する時間を先に延ばす方針をとったからです。しかしこの作戦に島田知事は反対しました。沖縄の住民のいのちをどう守るかがまったく考慮されていなかったからです。しかし軍司令部は南部に撤退し、沖縄の人々は進撃してくるアメリカ軍に戦火に直接さ

らされることになりました。

島田知事は最も信頼している荒井警察部長とともに避難して、沖縄のあちこちにある天然の壕（ガマ）に隠れては、住民をどう守るかの指示を出し続けます。4月27日、壕のなかで知事と市長・警察署長たちの最後の会議が開催されました。島田は、避難民が大量に逃げてきたときに、どうか自分の壕に受け入れてやってほしいと頭をさげました。そして行政を担う自分たちの責任は、どんなときでも住民を飢えさせないことだと説きました。夜の月明かりの下で芋や大豆を育てて収穫していこう。そして避難民がどうしてもなくなったら、どの畑の作物を食べても罰せられることはないようにしよう。…そう島田と荒井は命じたのです。どんなことがあっても、生きよ、という呼びかけでした。

4 二つの壕の出来事と島田の行方

アメリカ軍は、爆弾と機関銃と火炎放射器で沖縄の地形が変わるほど激しい攻撃を加えて進軍しました。各地の壕で住民の集団自決が多発します。互いを死なせる手段は、手榴弾の爆発であり、それがなくなるときにはカミソリで頸動脈を切る、紐で首をしめるなどの痛ましい方法がとられました。

たとえば、中部の読谷村のチビチリガマでは、避難した139名の村人のうち、集団自決で死亡した人は83名にものぼりました。生きのびた人の証言によると、そのなかに中国戦線に同行した経験のある従軍看護婦がおり、家族や親戚に自分が中国でみた日本軍の残虐な行為を語って聞かせます。それが戦争というものだと悟った人々は、死を迎えることを望み、看護婦が注射をして死なせていきました。また中国戦線で従軍したあと在郷軍人になっていた男性もおり、彼が「今度はうちらがアメリカからやられる番だ」と言って、壕の入り口に火を放ったのでした。

ところが同じ読谷村のシムクガマに避難していた村民約千人は、集団自決することなく米軍に投降して捕虜となり、生き残りました。避難民のなかに二人のハワイへの移民経験のある男性がいたからでした。男性のうち一人は、ハワイで農業からバスの運転手に転身し、5年ほどで帰郷していました。もう一人は、さまざまな職をこなしながら25年もハワイで生活し、英語もできるようになっていました。二人が肌身で知っているアメリカは日本が戦争で勝てるような相手ではなく、開戦のときに二人は戦争を批判するような言動をとって“非国民”扱いされていました。しかしシムクガマのなかで、二人は「アメリカ兵は手向かいしなければ殺さない」と周囲を説得し、ガマを出て米軍と交渉して約千人を投降へと導いたのでした。

近くにあった二つの壕の人々は、まったく違う運命をたどりました。

島田知事は、6月18日未明、これまで付き添ってきた職員と別れて南部の軍司令部に向かいました。付いていくと言う女性職員に、島田はこう諭しました。

「君たち女、子どもには（米軍は）どうもしないから、最後は手をあげて出るんだぞ。決して軍と行動をともにするんじゃないぞ。」

そして南部の摩文仁の丘の壕に、島田知事と3名の秘書・警護の担当者が一緒にたどりつきました。「このままお側におらせて下さい」と願い出る3名に、島田は「帰りなさい。これは私の命令だ」と厳しい口調で言いました。そしてやさしい声に戻り、「長い間、いろいろご苦労だった。」と、胸のポケットにあるお金をすべて渡しました。「僕

はもう使うことはないから、取っておいてくれ。皆、今後は自重自愛する（自分を大切に
にする）ように。」と諭しました。

翌 19 日、摩文仁の丘では軍の牛島司令官が、ここからは各自が最後まで戦えと最後の
命令を出しました。「生きて虜囚の辱めを受けず」と牛島は命じました。同じ日に、
壕を脱出する毎日新聞の野村支局長が、一緒に逃げようと島田を誘いました。島田は、
多くの県民を死なせてしまった責任が自分にはあるから逃げないと言い、妻からもら
った大切なものを君にあげると、荷物の中から博多織の角帯を差し出しました。野村は
兵士二人と必死に泳いで逃げ、最後は米軍につかまって助かりました。野村が波にのま
れそうになると、二人の兵士が野村の帯を両側から引っ張ってくれて助かったのでし
た。「僕は島田さんの帯で九死に一生を得た」と野村は言い続けたそうです。

その後の激しい戦闘のなかで、島田は行方不明になり、こんにちまで見つかっていま
せん。自殺したという噂もあれば、生き続けようとして戦死したという噂もあります。

おわりに

今日は、一人の野球選手が沖縄県知事となって、必死に人々に「生きよう」と呼びか
け続けた歴史を見つめました。沖縄戦では、約 15 万人の県民が戦死したと推定されて
います。県民の 4 人に 1 人が戦死したのです。ただし約 20 万人の県民が、県内外に避
難していのちをつなぎました。二つのことを振り返りましょう。

第一に、広い視野で学ぶことは、人々のいのちを支えることになるということです。
島田には、青春時代に学んだ、どんなに不利でも何とかしようとするとか、自分のポジ
ションを守るといったスポーツマンシップが生き続けていました。シムクガマでは、アメ
リカを学んだ人が、人々の自決を思いとどまらせました。広い視野で学ぶことで、私た
ちは時代に流されずに、大切なことを見つめられるようになるのです。

第二に、沖縄はつねに本土の身代わりになってきたということです。沖縄県民は本土
決戦を遅らせる持久戦のために戦火のなかに放り出されました。そして日本が降伏し
たあとも、アメリカ軍は沖縄を占領し続け、1972 年に沖縄が日本に返還された後も、
沖縄の米軍基地は日米安全保障条約にもとづいて存在し続けています。2020 年に沖縄
県が発表した米軍基地の騒音調査では、嘉手納基地近くのある観測地点で、騒音発生回
数が 1 日に 60 回、最大ピークの騒音は 105 デシベルでした。（蘇南高校が直面してい
る関西電力の鉄塔工事のヘリコプターの最大ピーク騒音が 70 であることと比較して
みてください。）アメリカ軍基地は日本にとって必要だと考える日本人は多いわけですが、
実際に基地のある沖縄の人々がどう考えているかが、忘れられがちなのです。

2022 年、今年、沖縄がアメリカの占領から日本に復帰して 50 周年です。

蘇南高校は、原爆が投下された長崎に修学旅行に行っています。だからこそ、広島・
長崎とともに、沖縄の人々のことにも思いをはせてほしい。この日本社会で生きている
様々な人々の声に耳をすませていきましょう。

【参考文献】

田村洋三『沖縄の島守』（中央公論新社《文庫》、2006 年）

TBS テレビ報道局『生きる』取材班『10 万人を超す命を救った沖縄県知事・島田勲』
（ポプラ社《新書》、2014 年）

屋嘉比収『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす』（世織書房、2009 年）